

速さを求めた転生オリ 主

『さばの味噌煮』

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

速さを求めた転生オリ主の戦い。

戦闘描写の練習をしたかった。後悔はしていない。

目次

速さを求めた転生才子主

—
1

速さを求めた転生オリ主

最初は憧れだった。ストレイト・クーガーという一人の男の生き方に憧れた。でも俺にはそんな生き方は出来なくて、だからせめて彼の『速さ』に追い付きたいと、そう思っていた。

そんなことを考えていた俺にチャンスがやってきた。『速さ』を。『能力』を。『可能性』を手に入れるチャンスが。

神様転生。そんな形でチャンスがやってきたのだ。

そして、奴は俺に聞いてきた。

「特典は、なにが良い？」

俺は答えた。

「『誰よりも速くなれる可能性』：それと……『ラディカル・グッドスピード』を」
憧れに追い付くために。憧れを追い抜くために。

そうして俺は転生したのだ。

『速さを求めた転生オリ主』

転生した世界には自分の魂を【固有^デ霊装^{バイス}】として顕現させ、魔力を使い異能を行使する【伐^{ブレイザー}刀者】という者達がいる。

俺は【伐刀者】を目指していた。誰よりも速くなるために。

『速さ』に関する成長速度は凄まじかった。中学生になる頃には、音など軽く置き去りにしていた。だが、まだだ。俺は何よりも速くなれるのだ。光だつて置き去りにしてやる。

そんなことを考えている俺だが、今は『七星剣武祭』の準決勝前である。

準決勝の相手は破軍学園の東堂刀華だ。これほど嬉しいことがあるだろうか彼女との戦いがこの『七星剣武祭』で一番の楽しみだったのだから。

速度も技術も申し分ない、いや、技術なら相手の方が圧倒的に上だ。そんな相手と戦

えばきつと俺はもつと速くなれるはずなのだ。

さあ、戦いに行こう。自分よりも強いであろう相手に俺の『速さ』で勝つために。



戦いが始まった。——瞬間、爆音

ゴオツツ——!!

凄まじい速度で俺と東堂刀華が衝突したのだ。

俺には近距離での攻撃しかない、だから——眼にも止まらぬ速さで蹴りまくっていた。

しかし、それらはすべて捌かれる。

「——!!」

「!?」

このとき俺にあったのは純粋な驚きだった。……まさか、俺の速さに追い付くとは
「ッ!？」

驚いている暇はなかったようで、その隙を狙われ吹き飛ばされた。
俺はそのまま相手に向かって加速し、技を放つ。

「衝撃のオ——」

東堂刀華が退いた。

「ファースト・ブリットオオ——!!!」

会場が吹き飛び砂煙を撒き散らす。

次の瞬間、東堂刀華が目の前にいた。それも刀は、もう半分抜刀された状態で。

「——かはッ」

壁に叩きつけられたが腕で防いだので吹き飛ぶだけですんだ。

……いや、そんなことより何故かわせたんだ。行動を起こしたのは吹き飛ばされてす
ぐだぞ。余裕でかわせるほど東堂刀華は速くない。それともここまで隠してたとしても
言うのか——!!

そんなことを考えてる暇は無いようだ。東堂刀華がこちらに向かって来る。

「——雷切」

こちらを真つ二つにするのではないか、という攻撃を

——全力で避けた

「なんツ——のォ——ツツ!!」

避けられはしたがすぐに追撃が来る。

「——!!」

「なん——ツツ——!!」

どういうことだ、何故こうも先を読まれるんだ!?

「——チツ」

軽く舌打ちをする。

とにかく、相手の能力を考えてみよう。

俺は避け続けながら考えた。

「ええつと……刀……電撃……電気?……電気!?!」

漫画で読んだことがある。微弱な電気信号から心を読む能力者、めだかボックスとかで!!

いや……でも……もしそうだとしたら、俺の速さじゃ足りない……

「いや、違う」

自分の考えを自分で否定する。

そうだ、心を読まれたってあストレイト・クーガーの男は戦っていたじゃないか。それに、何よりも——

「——今の速さで足りないなら、もっと速くなればいい!!」

まだまだ、伸びるはずの俺が全力を出してとどかないと感じているなら、全力を超えれば良い。全力であって限界では無いんだから!!

向きを変え、相手に向かって加速する。

「ぐッ——おおッ——」

足が悲鳴をあげる。無視しろ俺。一度上にとどけば俺の体は勝手に馴染む。そういう風にてきているのだから。

「——ううっ——っらアア——!!」

「!？」

東堂刀華が目を見開き驚いている。当然だ。俺だつてこんなに速くなるとは思わなかった。いや、今も速くなり続けている。

それはともかく

「さあ、いくぜええ——」

更に加速し、技を放つ。

「壊滅のオ——」

東堂刀華は構えた。真つ向から受ける気か。

「セカンド・ブリットオオ——!!」

「雷切!!」

ズドンツツ——!!!

爆音と共に周りに余波が飛ぶ。周りの被害はわからない。それでも戦いが終わって
いないのは確かだ。

だからこそ、あのセリフを言い切り札を切ろう。

『『受けるよオ——俺の速さを!!』』

全力の証に好きなセリフを言わせてもらった。

そして両者が決着のための技を放つ。

「瞬殺のオ——」

「——」

東堂刀華が踏み込む。同じ技で迎え撃つつもりか。いや、同じ技でも先程よりも強く
て速そうだ。侮らずに全力で——

「ファイナル・ブリットオオオオオオオツツ——!!!!」

「——雷ッ——切イイ——
!!!!」

二人の必殺が衝突する。

光が吹き荒れた。見ていた者すべての目が、耳が、鼻が、舌が、肌が、すべての感覚が消え失せた。

少しづつ感覚が戻り、観客たちはもう原形をとどめていない会場を見る。

そこにいたのは——

——血まみれの体で天に拳を掲げる『最速』の男だった。

後日談みたいなもの



あのあと、俺は東堂刀華に勝つも決勝に出られない程に消耗し、仕方なく辞退することになった。

しかし、それ事態はどうでもよく全快になった俺にあつたのは『東堂刀華とまた戦りたい』という思いだけで、それ故に行動も速かった。

俺は破軍学園に転入することにした。もう、来年には転入することになっている。どうだ、速いだろ！

『東堂刀華を追いかけて東堂刀華の通っている学校に転入する』やろうとしていることがストーカー染みている自覚はある……というか、これまますトーカーだよ、と感じているがそれでも戦いたくて仕方がないのだ。

だから、きっと俺は東堂刀華に惚れたわけではないのだ。……ないのだ……多分